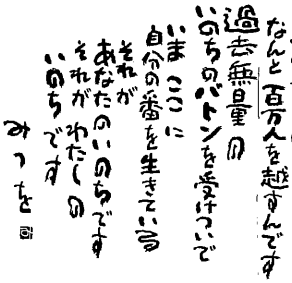
さくら第506号
令和 4年 2月

さくら

発行所　さくらそろばん
発行者　平瀬重雄
春江町境17-7:℡51-1337
hirase@mx2.fctv.ne.jp



『伝統行事と神秘さ』

正月に日の出とともにやってくる神様のことを「**歳神様・としがみさま**」とよび豊作や健康をもたらすといい、神様が家を見つけやすいようにと年末に玄関にしめ飾りをかけて迎えます。

床の間などに置かれた鏡餅に年神様の魂がやどり、1年間、その家に幸せをもたらします。

鏡餅は大小二段あり太陽と月を表し丸い形は円満に年を重ねるためといいます。

また、会社や公民館などの建物の前には門松が左右に置かれています。常緑の松は神様が宿る木とされ、真っすぐに節を伸ばす竹と新春に咲く梅が縁起物として添えられます。

門松などはふつう「**松の内**」とよばれる1月7日まで飾りますが地域によりちがいます。鏡餅に添えられるダイダイは家が代々にわたり繁栄するようにという意味合いがあり、しめ飾りの縄が丸いのは途切れることがないようにという意味が込められています。

1月11日になると「**鏡開き**」で、正月飾りの鏡餅を下ろして食べる行事です。地域によって違いますが、江戸時代に武家から始まった習わしといい、縁起のよい食べ物とされる鏡餅を包丁などで切ることは切腹を意味し、縁を切るともいわれるので切らずに木づちなどで割るのがよい方法とされています。11日ともなれば餅にひびが入り手で小さくする事もできます。

神様の恩恵をいただくから「切る」よりも「開く」という表現になっています。

神様にお供えしたものをいただくことを「**お下がり**」といい、誰かのお古をいただく時にお下がりといいますが、これが語源です。

「**どんど焼き**」は小正月（こしょうがつ）という1月14日～16日の間に行われる習わしで、旧暦で1年の最初の満月にあたる日が小正月。

平安時代に宮中で行われた「**左義長・さぎちょう**」という行事が民間に伝わったといいます。

この左義長は宮中の庭で毬杖（ぎっちょう）と呼ばれる木製の杖を3本結び、その上に扇子や短冊を置いて、陰陽師（おんみょうじ）が歌いながら、これらを焼いた行事といいます。

この行事には、旧年のけがれをはらい、春の到来を喜び五穀豊穣を祈る意味があります。

どんど焼きの語源については、燃やしている青竹の弾ける音が「どんどん」という音からついた、燃え盛る炎の神秘さから「尊（とうと）や」と人がはやし立てたから、どんどん燃える様子からついたとなどいろいろあるようです。

毎年3月2日、奈良の東大寺二月堂へ「御香水（おこうずい）」を送る伝統行事『**お水送り**』が行われます。小浜市の神宮寺の井戸でくみ上げられた御香水を午後7時ごろに火を移した松明（たいまつ）を手に、マスク姿の僧侶らが注がれる「**鵜の瀬**」までの約1．8キロを練り歩き、8時半すぎに白装束の住職が岩場に立ち送水文を読み上げ邪気払いをして遠敷川（おにゅうがわ）に注ぐと10日後に90キロ先の東大寺二月堂の井戸「若狭井」に湧き出るといいます。『**お水取り**』は1200年以上前から続いており東大寺領であった若狭の荘園から水を運搬してきたことに由来するそうです。

ずいぶん前、鵜の瀬に小さな資料館があり年配の管理人から聞いた話しでは、流れがカーブしたあの川淵の穴へアキカンなどに名前を書いて浮かすと、ちょうど十日で奈良に着く地下水路があると教えられました。

奈良の中学生が毎年修学旅行で来て、試すとピッタリ十日で漂着するそうです。古来、鵜が地下水路を通り奈良へ向かったという神話の信ぴょう性を感じます。川の流れは途絶えても、地下水路は途切れないといいます。

連綿と続く伝統行事には人智を超えた神秘なものが受け継がれています。